

勝本町文化財調査報告書第8集

串山ミルメ浦遺跡

—第3次調査報告書—

1990

長崎県勝本町教育委員会

勝本町文化財調査報告書第8集

串山ミルメ浦遺跡

—第3次調査報告書—

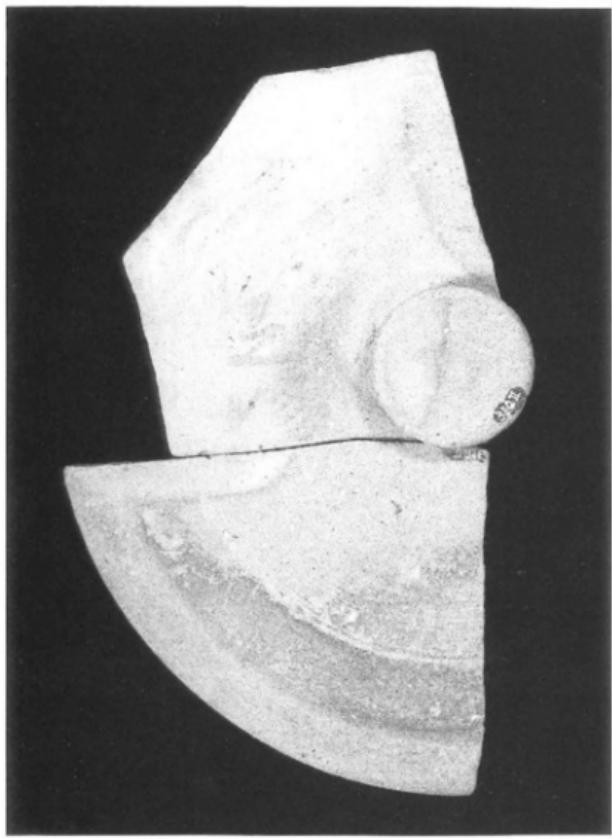
1990

長崎県勝本町教育委員会



あまのかるみるめの浦に白雪のまたら鳴にもふりかかるかな

吉野秀正



墨書土器

発刊によせて

古代への追憶と発掘後の厳正なる事実、また意外性、私達の
古代への夢と憧れは、とめどなく続く。

串山ミルメ浦遺跡の発掘、そして報告も今回で第3回となる。
さて、今回の発掘は古代人の全体像を捉えるに特に破格のもの
のと言うことが出来る。そのことは、地元教育委員会や県文化
課スタッフの限りない研究踏査と執念の結果と思う。

即ち、古代人の住居跡、石組みカマド跡の遺構等に夥しい遺
物が出土している。またその中でも古代人の加工場跡や、特に
漁業専門集団の生産活動の跡等は特に古代遺跡の圧巻と言える。
即ち、古墳時代後期から奈良時代にかけての有様が如実に判明
している。

更にまた、前号で報告済みであるが「龜ト甲」が17点も出土
したことは、当時の巣岐が日本國の中に如何なる位置づけをさ
れていたのか、このことについても今后の発掘次第で興味津津
たるものがある。

ともあれ、古代への探究は日本民族のルーツを求める夢の学
習であり、永遠のロマンである。

平成2年3月

勝本町長 萩 田 一 郎

発刊にあたり

平成元年9月、串山ミルメ浦遺跡の海底部の発掘調査を実施した。

その結果、海面下に広大な貝塚がひろがることを確認した。貝層からは遺跡の陸地部と同様に古墳時代から奈良時代にかけての土師器や須恵器が出土し、骨角器や獸魚骨も認められた。

小串半島の南の海底からは、加工痕のある木製品が多数出土しており、今後に大きな問題をなげかけている。出土地点は半島の陰になるため風当りが弱く、波おだやかな海域となっている。言いかえれば、船の繫留地として最適の場所なのである。

出土したクイ、木片、切りクズなどを見ていると、舟やつみ荷につけられた木簡などが海の底にねむっているのではないかと、ついつい、考えてしまう。

串山ミルメ遺跡の本質をつかむためには、まだまだ今後の努力が必要となる。調査を担当された長崎県文化課の宮崎貴夫、村川逸朗の両氏に感謝を申し上げる。

平成2年3月

勝本町教育長 森 山 浩

例　　言

1. 本書は、平成元年度に実施した、長崎県壱岐郡勝本町東触字白浜・小串に所在する串山ミルメ浦遺跡の範囲確認調査（第三次調査）の報告書である。
2. 調査は、勝本町教育委員会が主体となり、県教育委員会が調査を担当し、平成元年9月7日～9月17日の11日間実施した。
3. 調査関係者は以下のとおりである。

勝本町教育委員会	教育長	森山 浩
	総務係長	須藤資隆
長崎県教育庁文化課	調査係長	田川 肇
	主任文化財保護主事	宮崎貴大（調査担当）
	文化財保護主事	村川逸朗（〃）
調査協力者	壱岐郷土館長	横山 順
	県文化財保護指導員	松永泰彦

4. 本書は宮崎・村川により分担執筆され、文責は各項文末に記した。
5. 本書の編集は、宮崎による。

本文目次

I 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の立地環境	1
2. 周辺の遺跡	2
II 調査	7
1. 経緯	7
2. 調査概要	9
3. 土層	10
4. 出土状況	10
III 遺物	13
1. 土器	13
(1) 土師器	13
(2) 須恵器	13
(3) 大陸系土器	14
(4) 近世陶磁器	14
(5) 出土土器の組成について	20
2. その他の遺物	22
(1) 木器	22
(2) 骨角器	22
(3) 土鍋	22
(4) 石製品	22
IV 結語	24

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 周辺の遺跡.....	3
第3図 天ヶ原石棺群B地点出土土器（1/3）.....	4
第4図 試掘場配置図及び周辺地形図（1/1,000）.....	折込
第5図 二次調査出土亀ト（1/2）.....	7
第6図 二次調査1号住居跡及び出土土器.....	8
第7図 上層図（1/60）.....	折込
第8図 出土土器①（1/3）.....	15
第9図 出土土器②（1/3）.....	16
第10図 出土土器③（1/3）.....	17
第11図 出土土器組成グラフ.....	21
第12図 出土木器（1/3）.....	22
第13図 その他の遺物（1/2）.....	23

表 目 次

表1 出土土器観察表.....	18~19
表2 出土土器数量表.....	21

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景・遺跡近景.....	29
図版2 調査風景.....	30
図版3 土層 ①.....	31
図版4 土層 ②.....	32
図版5 出土土器①（1/2）.....	33
図版6 出土土器②（1/2）.....	34
図版7 出土土器③（1/2）.....	35
図版8 その他の遺物（木器は1/3, 他は1/1）.....	36
図版9 天ヶ原石棺群B地点遺物.....	37

I 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地環境

壱岐島は、九州島の西北海中、玄界灘に浮かぶ島である。南北17km、東西15kmを測り、属島を併せてても139haの小規模な島である。島の基盤をなすのは第三紀の堆積岩で、そのうえを玄武岩が覆ってなだらかで低平な地形を形成している。その姿は、峨々たる山容の島である対馬と比較され、女性的な形容にたとえられる。

古来、壱岐は対馬とともに、大陸と九州本土の間に位置するところから、大陸交渉・交流において重要な役割を果してきた。3世紀の中国の史書『魏志倭人伝』には「一大國」の名で登場し、「やや田地があるが、水田を耕しても食料には足らず、やはり南や北と交易して暮らしている」と記述され、活発な交易活動を物語っている。この当時の具体的な内容を示す弥生時代の著名な遺跡として、原の辻遺跡とカラカミ遺跡をあげることができる。

古墳時代では、現在260基ほどの古墳が知られており、「古墳の島」と呼称されるほどに、島内各地で大小の古墳をみることができる。この数は県内古墳の約半数を占めており、県内の面積約3.4%ほどの島に濃密な古墳の分布がみられることを示しており注目される。この古墳のほとんどは後期古墳と考えられ、爆発的な増加であったにちがいない。古墳造営層の拡大が、單なる内在的発展であったとは考えがたく、その契機として中央勢力の政治的な外在的な要因があったことが想起される。

昭和62年に調査されたカジヤバ古墳では、ラセン状暗文を施した畿内系の土師器杯が出土しており、7世紀前半に比定されている。また昭和62年から調査が行われている壱岐国分跡で



第1図 遺跡位置図

は平城様式の軒丸瓦が使用されており、行政上の統括官庁である大宰府を通り越して、直接結びついた中央との緊密な関係が看取できるのではないか。

朝鮮への派兵や大陸との緊張状況の際には、前線基地として兵員の輸送や物資の調達・運搬に島民達が積極的な関わりをもったことが推測され、663年の白村江の戦に敗れた後には、辺境の要害として防人と烽が配備され、異国に対する警護・防備にあたっている。

このように、対外的に安定期には大陸文化の流入の担い手として交通の要衝であり、有事には攻撃・防衛の辺境基地としての役目を負わざるを得なかつたところに、壱岐のもつ特殊的な歴史像をみることができよう（この部分については正林腰氏の考えに負うところが多い）。

遺跡は、壱岐島の北西部を占める勝本町の北端に在り、東触字白浜・小串に所在する。前述したように、島のほとんどは玄武岩に覆われているが、遺跡の在る串山や辰ノ島・若宮島・名島島一帯では古第三紀の勝本層が露れ、海岸線は切り立った断崖をなして平地は乏しい。

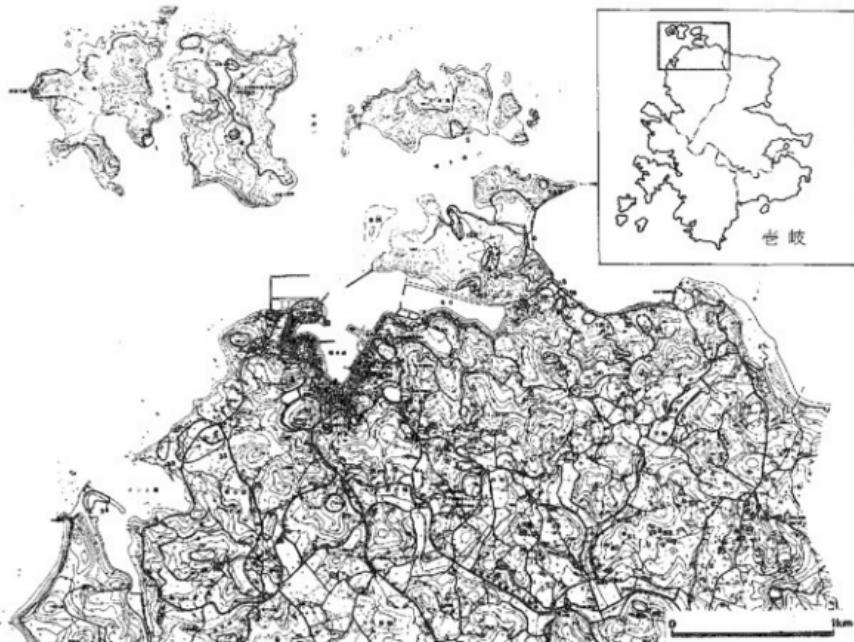
串山半島は、もともと島であったものが砂丘により本島とつながった陸繫島であり、本遺跡は小串と串山をつなぐ標高3~7mの砂丘に成立したものである。砂丘は7,000m²ほどの広がりを有し、東側は外海に面した砂浜で、西側はミルメ浦と呼ばれる湾口が長い入り江で、湾奥は砂泥性の干潟になっている。砂丘の北半は畠地として利用され、南半部は荒地でハマボウなどが繁茂し、一部が県指定の天然記念物の砂浜性ハイビャクシンの自生地となっている。

遺物は、砂丘から干潟にかけて出土するところから、50,000m²ほどの面積が遺跡分布範囲として推測されていた。

2. 周辺の遺跡（第2図）

串山半島周辺は、厳しい断崖の丘陵地と玄武岩台地の縁辺斜面が展開し、平坦地は小規模な砂丘や狭小な谷底平野が点々とみられずにすぎず、大規模な集落遺跡は成立しにくい土地柄である。

弥生時代の遺跡は、正村遺跡（28）、天ヶ原遺跡（15）、セジョウ神遺跡（16）の砂丘に立地する遺跡と、若宮島の北端にある若宮島石棺群（2）の墳墓が知られている。正村遺跡は、聖母神社境内に在り、今も上器細片や貝殻の散布がみられる。以前に、石錐・敲石・黒曜石剣片などが採集され、カメ棺や石棺が発見されたといわれているが明瞭でない。居住域と墓域が分離していない様子からみれば、弥生時代でも前半期の遺跡であろうか。天ヶ原遺跡では、弥生期の遺物と共に伴する朝鮮系の無文土器や牛角把手が採集されており、他に土師器・須恵器も出土しているところから、奈良時代頃まで継続した遺跡であろう。セジョウ神遺跡は、砂浜を工事中にセジョウガミといわれる石祠の下から中広鋼矛が3本発見された埋納遺跡である。位置的に壱岐島の北端に在り、境界を守護するための祭祀埋納とも推察される。若宮島石棺群は、2基の箱式石棺墓が確認され、内から四孤・四乳の内行花文帶式の古式仿製鏡が発見されている。いわゆる小形仿製鏡に所属するもので、弥生時代後期後半～終末墳の墳墓であろう。小串の北



第2図 周辺の遺跡

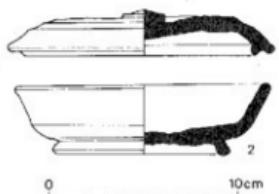
東端に在るオオタキ遺跡(195)では小形の石棺墓が確認されており、眼下に海が広がる類似した立地の在り方を示し、同様な時期の所産である可能性をもつてゐる。

古墳時代になると、串山古墳群(8~13)や天ヶ原石棺群A地点(17)と同B地点(18)の墳墓が知られている。串山古墳群は、串山の丘陵頂部に7基の比較的小形の古墳が群集するもので、4号・7号墳では横穴式石室が確認されている。昭和55年には天ヶ原圓地整備事業に伴って基数・規模等の確認調査が行われ、須恵器が少量出土している。^(註7)古墳時代後期の群集墳であり、直下に立地する串山ミルメ浦遺跡とも密接な関係をもっていたことが考えられよう。天ヶ原石棺群は、玄界灘を望む狭隘で低平な台地先端部に在り、A・B両地点は200m離れた位置にある。B地点は、昭和51年に道路拡張を行った後に側壁が崩れ石棺が露出したものである。その際、須恵器2点と鉄刀片、鉄鎗が採集されている。須恵器は、杯蓋と杯身のセットで、形態の特徴から7世紀中葉あるいはそれよりやや下る時期

^(註8)に比定される資料である(第3図、岡版9)。

古墳時代から古代にかけて遺跡は、串山ミルメ浦遺跡、天ヶ原遺跡の他に、名島遺跡(5)、猿浦遺跡(196)、クナリガ浦遺跡(197)があげられる。名島遺跡は、東亜考古学会が発掘し、アワビ・サザエを主体とする貝塚が確認されたといわれているが詳細は不明である。他の遺跡も同様に実態は明瞭でない。

(宮崎)



第3図 天ヶ原石棺群B地点
出土土器(1/3)

註1 平野邦雄「魏志倭人伝と現代語訳」「邪馬台国への道」朝日新聞社 1980

註2 劇島和明・本田秀樹『カジヤバ古墳』芦辺町文化財調査報告書第3集 芦辺町教育委員会 1988

註3 劇美主任高野晋司氏教示。

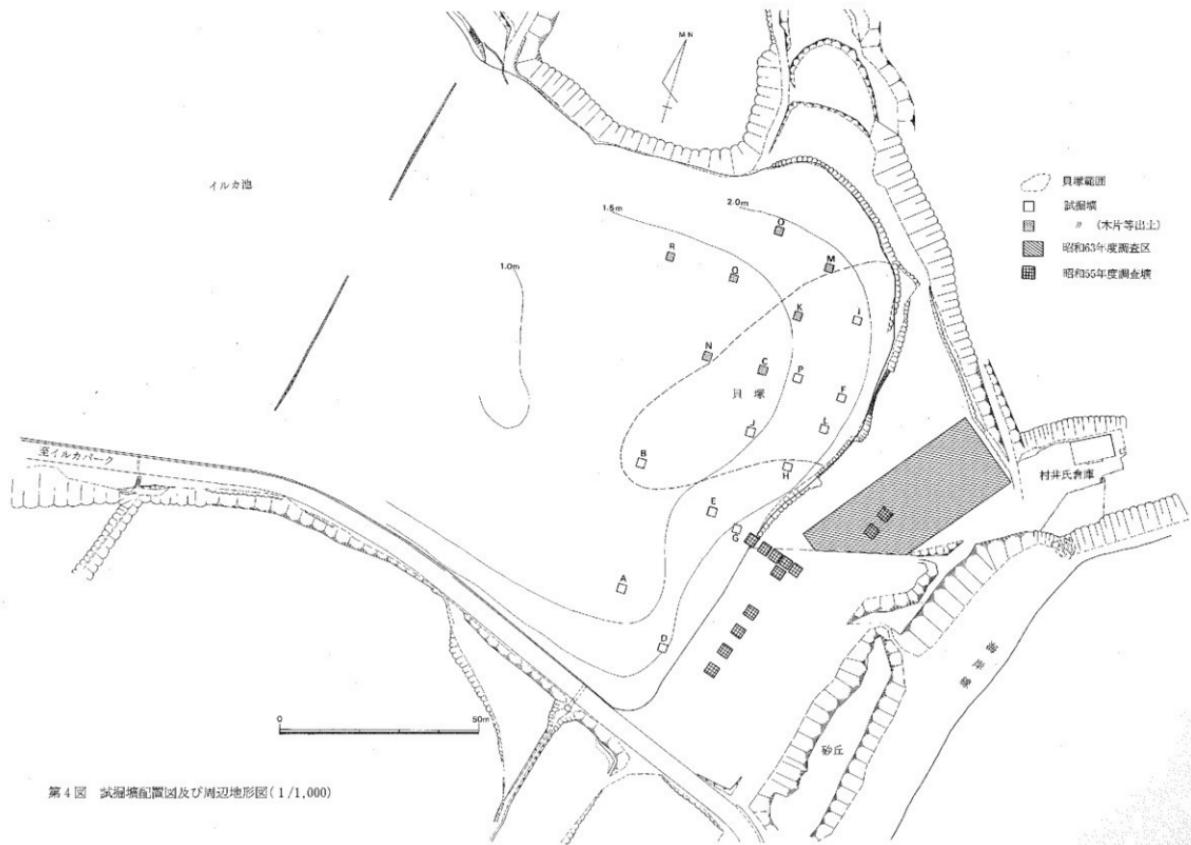
註4 平川敬治編『串山ミルメ浦遺跡』勝本町文化財調査報告書第4集 勝本町教育委員会 1985

註5 計4文献。剣矛の報告者は岩永省三氏。

註6 楠口隆康『古鏡』 新潮社 1979

註7 調査者安来勉氏教示。

註8 田崎博之「干潟遺跡出土土器の編年」「干潟遺跡I」福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会 1980

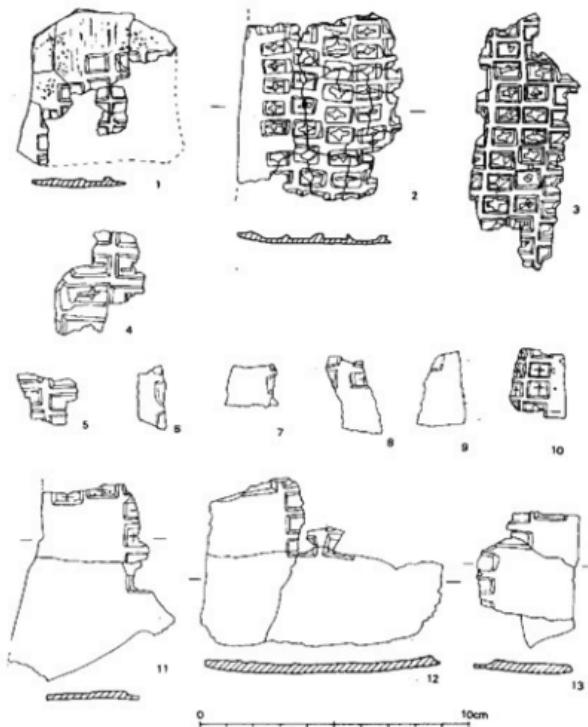


II 調 査

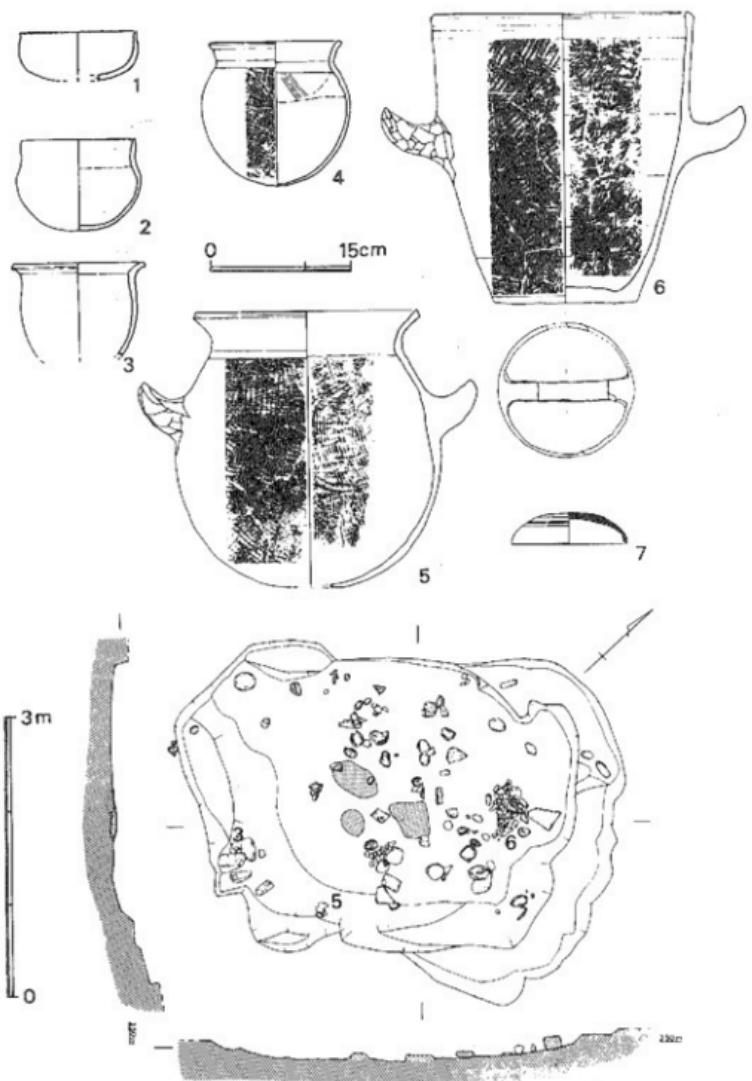
1. 経 緯

本遺跡では、今回調査までに2回の発掘調査が実施されている。

昭和55年には九州大学文学部考古学研究室による発掘調査が行われ、その成果は昭和60年に報告書として刊行された。それによると、縄文中期の並木式が数点、弥生土器が若干みられたが、古墳時代から奈良時代にかけての遺物が主体的に出土し、炉跡も検出されている。特に、アワビ・ザザエなどの漁獲物をはじめ、ヤス・アワビオコシ・土錘・有溝石錘の漁撈具やタクキをもった製塩土器が多く出土したことから、アワビ加工等を目的とした古代漁人集団の季節的な漁撈作業場の遺跡として位置づけられている。^(註1)



第5図 二次調査出土亀卜(1/2)



第6図 二次調査1号住居跡及び出土器

昭和63年には、砂丘北半部が個人による土地改良工事にかかることになり、国庫補助事業によって発掘調査が実施された。その結果、作業工房と考えられる住居跡、炉跡、石組カマド跡の遺構が検出され、古墳時代後期から奈良時代にかけての夥しい数の遺物が出土した。

なかでも商品価値の高いアワビ・ザザエ等の漁獲物が非常に多く出土することから、水産加工を目的とした場であり、中央との関係において組織的に造りあげられた専門的漁業者集団としての評価がなされた。^(註2)

また、それらの遺物と共に伴して龜甲が17点出土し、卜部である岩岐(伊岐)氏と何らかの関連を有することが考えられ、いろんな問題を提起することになった。

2. 調査概要

今回の調査は、砂丘西側の干潟を埋め立てる計画があるために、町教育委員会が主体となって範囲確認調査を実施したものである。海底部分の調査という特殊性を考慮して前半と後半に分けて行う予定であったが、内海の干潟で波がおだやかであったことが幸いし、前半の平成元年9月7日～9月17日の11日間で範囲確認の目的を達したので、後半の調査は行わなかった。

調査は、干潮時に標高1～2m前後の干潟に2m×2mの試掘場を設定し掘り下げる方法で行い、A～Rの18ヶ所の試掘場を設定し72m²を発掘した。

その結果、F・P・C試掘場を中心として約2,000m²の範囲に貝層が広がっていることが明らかとなり、貝層からは砂丘部分と同様に古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器が主体的に出土し、骨角器や獸骨もみられた。また、北側のC・K・N・O・Q・R試掘場では木片や種子等が発見され、加工痕のある木製品も出土している。Q試掘場では墨書き土器の出土もみられた。なお、H試掘場では最近埋められたイルカがあらわれ、すさまじい腐臭のため30cmほど掘り下げただけで放棄した。

(宮崎)

発掘作業工程

時 月/日	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
9/7											
8											
9											
10											
11											
12											
13											
14											
15											
16											
17											

3. 土層（第7図）

今回の調査対象地が内海の砂泥性の干潟であり、満潮時には遠浅の海底遺跡となる地理的条件のために試掘調査場の土層壁が崩れやすく、土層図をとるには敏捷性を必要とした。第7図には、遺跡の南北のラインを2本、I、F、L、G、D調査場と、M、K、C、J、E、A調査場。そして、東西のラインとして、I、K、Q、R調査場と、F、P、C、N調査場の2本を、それに加えて、B、O調査場を併せて掲載している。

[遺跡全体を通しての土層]	(概説的な基本土層)
1 層…表土（砂層）（細砂）	1層…表土層（細砂）
1'層…黄灰色砂層	2層…黄灰色砂層（貝層がある試掘場ではこの層に貝が混じる。また、この貝層も疊が混じるか、破碎貝層の貝殻が大きいか小さいかで上下2層に分かれれる。貝塚で遺物包含層）。
2 層…灰黒色砂層	
3 層…黄灰色混貝砂層（部分的に疊混じり）	
4 層…黄灰色砂層（部分的に疊混じり）	
4'層…暗灰黄色砂層	
5 層…黄褐色砂層	
6 層…黄灰色砂泥層	

第7図の、例えばR試掘場では上層から下層へ1層、4'層等としているが、実際の遺物の取上げは上層から下層へ通し番号を付している。1層は1層、4'層は2層となる。

4. 出土状況

各試掘場の層毎の遺物出土状況は、まず、獸魚骨ではF試掘場2層、K試掘場2・3層等が多く、アワビ貝他は、B、J、K、N、Q試掘場の2・3層等が多い。また、木器（木材を含む）は、C、K、N、O、Q、Rの各試掘場の2・3層で出土していて、調査対象地中央から北側に多い。そして、松の実（松ぼっくり）が、K、R試掘場の2・3層から、桃？の実が同じくK試掘場の2層から出土している。石製品は、L、P試掘場から出土している。

ところで、土器の出土状況は、C、F、J、L、Pの各試掘場から多く出土しているが、必ずしも、土器の出土量が多い所で、その他の獸骨、アワビ貝他、木器等や、種子等の遺物が多く出土している訳ではない。

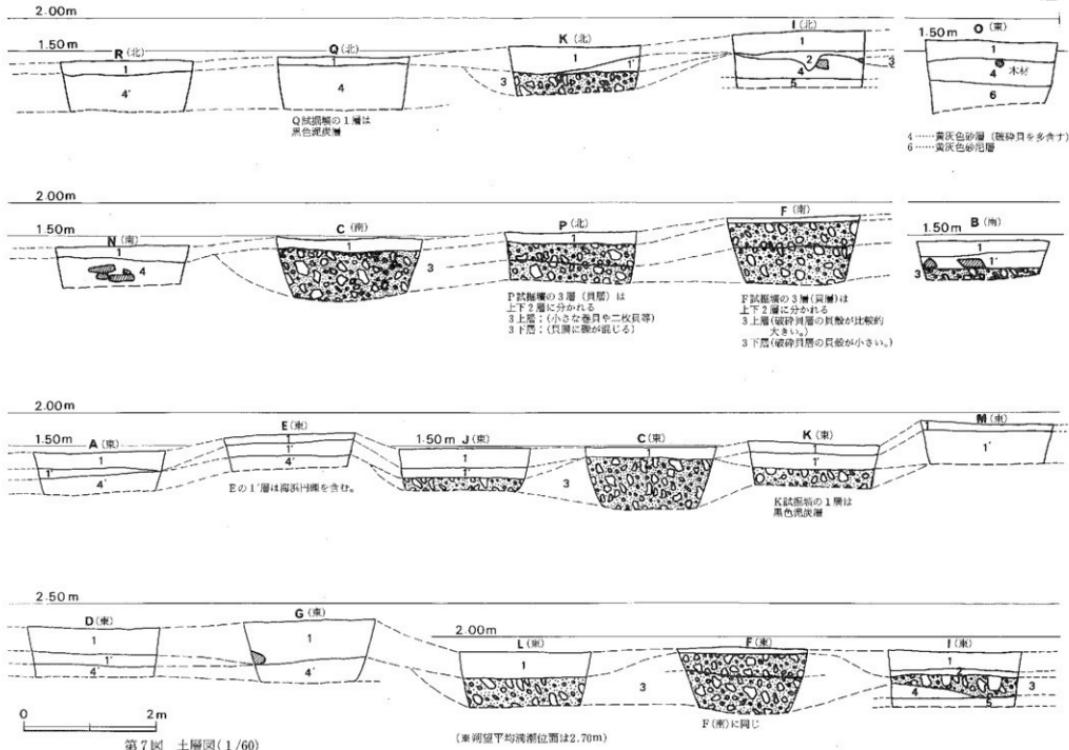
また、木材、種子（松の実）が、調査対象地の北側（M、K、C、N、O、Q、R）で出土するのは、この場所に松林の存在が考えられ、これは、^{（東33）}宍戸名勝図誌に描かれた白砂青松の地のパノラマと、時代は隔たるが関連するものだろう。

（村川）

註1 平川敬治編『串山ミルメ浦遺跡』 勝本町文化財調査報告書第4集 勝本町教育委員会 1985

2 安楽勉編『串山ミルメ浦遺跡』 勝本町文化財調査報告書第7集 勝本町教育委員会 1989

3 後藤正恒『宍戸名勝図誌』 名著出版 1975



第7図 土層図(1/60)

III 遺 物

1. 土 器

今回の調査において2,060点の土器・陶磁器類が出土したが、そのほとんどを占めるのは、古墳時代から古代にかけての土器である。それらのうち34点を図化した。

(1) 土師器 (第8図、図版5)

杯 (1)

体部が丸味をもつ杯で、体下半から底部にかけて回転ヘラケズリを施している。風化を受けしており、ミガキについては不明。8世紀後半代のものか。

椀 (2)

体下半は丸味をもち、体部が直線的に開く椀である。部分的に平滑な仕上げ面が残るが、風化を受けており、ミガキについては明瞭でない。8世紀前半～中頃に位置づけられよう。

甌 (4・5)

「く」字形に口縁が外反する甌で、両者ともに胴に張りをもたない。4は、5に比較して小形で、口縁が強く折れ曲がる。両者とも、奈良期に包括される資料であろう。

瓶 (6)

6は甌の底部と考えられる破片である。内外面ともハケ調整し、さらに端部をヨコナゲにて仕上げている。

甌 (9・10)

9は体上部片で、内面はススが付着し黒ずんでいる。10は底部片で、平坦な底面から内湾気味に体部が立ち上がる。9は口径が21.2cmしかなく、比較的小形の部類か。

把手 (7・8)

甌、甌あるいは甌の副部に付く把手であるが、7・8とともに器種は明確でない。両者ともに手づくね状に整形されているが、7はソケット式にはめ込まれたらしく構造形の柄端部が内面に覗察できる。

製塙土器 (3)

有筋の平行条線タタキを施す玄界灘式製塙土器といわれているもので、内面には細かい平行条線の当て具痕が認められる。

(2) 須恵器 (第9・10図、図版6・7)

杯蓋 (11・12、15～19)

11・12は、身受け返りのないもので、11は天井部と体部との境に沈線を有し、12は痕跡的に淡い段がつくものである。形状から11はⅢB期、12はⅣA期に所属するものであろう。

15～19は、口縁を折り曲げ嘴状につくるものである。15・16はやや器高が高く、口唇は浅い凹部を形成している。15は扁平なつまみが付き、天井部には「之牟」の墨書が認められる。8世紀前半に位置づけられるものか。17～19は、器高がやや低くなり、前者に比べ後出する様相をもつ。8世紀中頃～後半にかけてのものか。

杯身 (20)

体下半が丸味をもって立ち上がり、口縁がわずかに外反する杯身である。7世紀後半に位置づけられるものか。

有高台杯 (21～25)

21～25は、高台をもつ杯身である。21は、底径7.1cmの小形品である。22は高台がやや長めでふんばりをもつ。23・24は体下半が丸味をもち、24は体部と底部の境に稜がつく。両者ともに断面四角形の小さな高台で、外方に少しほねている。25は、体部と底部との境に稜がはいり、^(注11)体部が直線的にのびるものである。川述昭人・森田勉氏らの年代観によれば、22は7世紀中頃～後半、21・23・24は8世紀前半、25は8世紀後半に位置づけられる資料であろう。

壺 (26・27)

26・27は高台付の壺底部と考えられるもので、26については楕の可能性ももっている。器種的には、短頸壺、長頸壺になるものと予想されるが、上部を欠失しているので、年代的にも7世紀後半～8世紀代の年代幅に包括するものとしておこう。

壺 (28・29)

28は朝顔形に開く口頭部破片。端部は玉縁状に肥厚され、稜線はシャープさを欠いている。29は、胴部破片である。外面は平行条線タタキのあとカキ目調整される。内面は同心円文がみられる。古墳時代後期～奈良時代に包括されよう。

(3) 大陸系土器 (第10図、図版)

朝鮮半島系土器と考えられるものが6点出土している。そのうち、4点は瓦質で焼きが甘いもので、2点は陶質で焼きが硬質のものである。

軟質土器 (30・31)

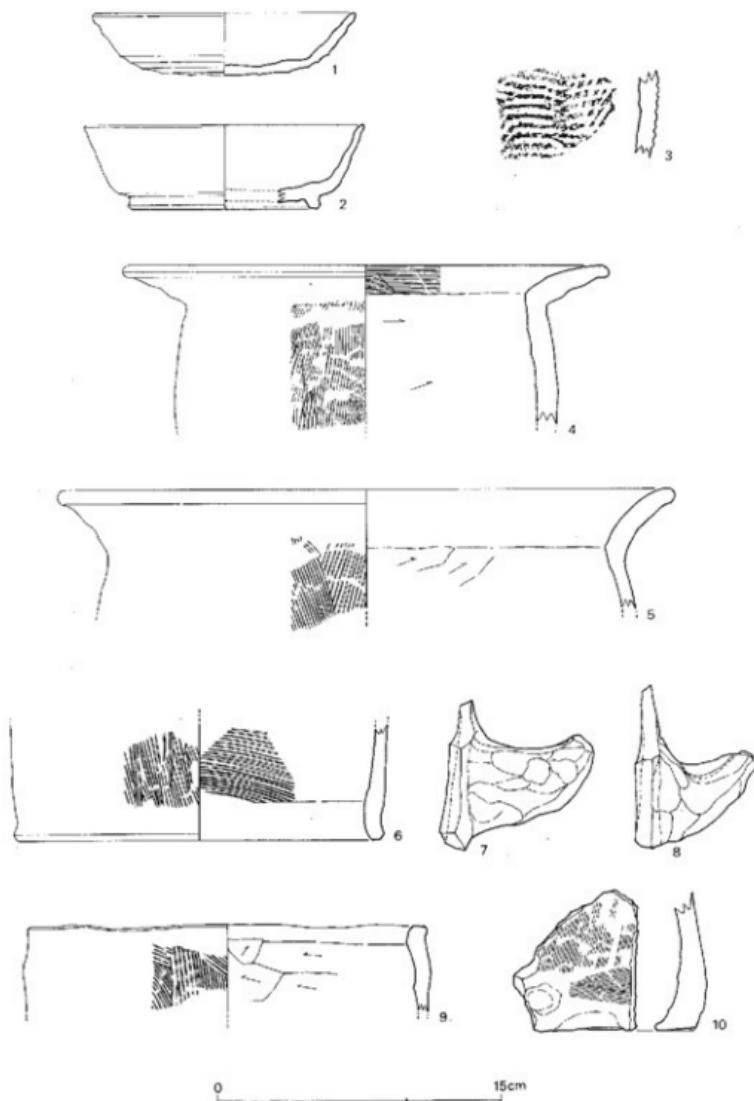
両者ともに、外面は格子目タタキを施し、内面は風化を受けるが平滑なナデ仕上げのようである。30の外面にはさらに2条の沈線がはいる。器種は広口壺であろう。

陶質土器 (32・33)

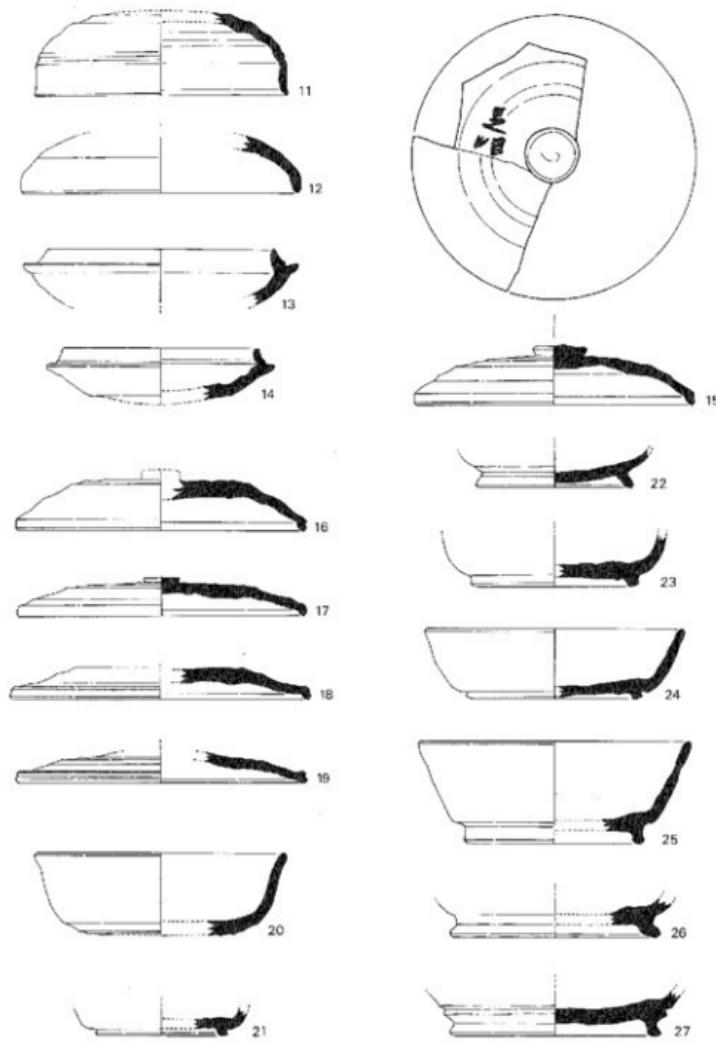
32は外面に網目の繩文タタキが施される。薄手づくりの壺であろうか。33は、大きく広がる底部破片で、高杯の脚裾部であろう。端部は丸く肥厚され、小さく突出する突帯がつく。

(4) 近世陶磁器 (第10図、図版)

近世陶磁器は10点出土しており、貝層等にあるものは擾乱や調査中の混入によるものと考え



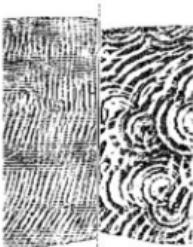
第8図 出土土器①(1/3)



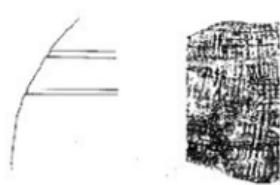
第9図 出土土器②(1/3)



28



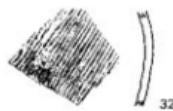
29



30



31



32



34

0 15cm

第10図 出土土器③(1 / 3)

表1. 出土土器観察表

単位 cm () は推定値

番号	調査場 所	部 位	口 径 深 度	文様・手法・特徴	色 調	胎 土	燒 成
1	K 3層	土器部 杯 1/3片	(14.2) (3.3)	体部に丸窓を有する杯。体下部はろくろ右廻りのヘラケズリを施す。外周は風化著しく調和しており、内面も風化を受けるが、半溝なナデ仕上であろう。	褐色	0.5~3mmの石英、0.5 mm金雲母含む	普通
2	Q 4層	土器部 杯 口~底	(15.0) (4.5)	体下部は丸窓をもち、体部は直線的に斜く。外周は著しく風化しておらず、内面も風化を受けるが、部分的に平滑な仕上げ面が残る。	外、明赤褐色 内、褐色	0.5~1mm石英含む	普通
3	M 1層	土器部 裏 剥離部		有筋の平行条縫タスキが外周に施され、内面には細い平行条縫の当て具筋がある。全体に風化を受けもらくなっている。要塗土器といわれているものである。	褐色	1~2mm石英含む	普通
4	N 4層	土器部 裏 口~側	(26.0)	あまり筋がない圓窓から、逆「U」字状に口缺が強く被覆するもので、輪郭外周と口縁はハケ調整。口縁外側はヨコナカ。制御唇面はヘラケズリ。	外、にぶい褐色 内、茶色っぽい褐色	1~4mm石英多く含む 1mm金雲母若干含む	わりと 良好
5	C 3層 口~側		(33.0)	「U」字形に口缺が外反する腹。脇部はあまり張をもたないようだ。外周は風化を著しく受けているが、脇部はハケ目が残る。ヨコはやや渦巻きナデ仕上げ。兩端部はハケナズリされる。	圓、明赤褐色 口、浅黃褐色	1~3mm石英含む 1mm金雲母若干含む	普通
6	J 1'~3層 瓶 底~半		(19.7)	直線的に立ちあがる体部、下端はやや丸味をもつ。体内・外周はハケ被覆され、下端はヨコナカにして平滑に上げられていた。	赤っぽい褐色	1~2mm石英含む	良好
7	K 1'~3層 把手	土器部 把手		楕あるいは圓の把手。指撲形、ナデ仕上げ。内面はヘラケズリされるが、3×2.5cmの梢円形状に把手のソケット部分がみられる。	茶色っぽい褐色	1~2mm含む	良好
8	Q 4層	土器部 把手		楕あるいは圓の把手。指撲形、ナデ仕上げ。内面はヘラケズリ。	褐色	1~2mm石英、1mm角 閃石含む	普通
9	N 耕土	土器部 カマド 口~側	(21.2)	青緑的に立ち上がり。上部は平振面をなす。外周はハケ調整。脇部はヨコナカされ、上方にはハケ目が残る。体内面はヘラケズリ。内面はスグに削りし、黒ずんでいる。	外、淡黄褐色 中、にぶい赤褐色 下、黒褐色	1~2mm石英多く含む 0.5~1mm角閃石、金雲 母含む	普通
10	C 3層	土器部 カマド 底		カマドの底部分。外周は風化を受けてハケ目が不規則になっている。指サエ痕もみられる。内面はヘラケズリ。上半、中段、下端で色調が異なっている。	上、褐色 中、にぶい赤褐色 下、黒褐色	1~2mm石英多く含む 0.5~1mm角閃石、金雲 母含む	普通
11	C 耕土	土器部 杯蓋 口~底	(13.6)	天井部と体部の間に風化を有する杯蓋。天井部上端が圓板ハラケズリされる様は、回転ナデ調整される。内面はやや難經している。	外、淡灰色 内、褐色	1mm石英若干含む	普通
12	M 1層	土器部 手縫 口~体	(14.8)	体部と天井部との境には浅い凹が筋膜的に残り、天井部は丸窓をもっている。残存部が全体に回転ナデ調整される。	淡灰色	1~2mm石英含む	普通
13	F 3層	土器部 杯蓋 口~体	(12.2)	立ち上がりが比較的小さく内傾するもので、残存部は回転ナデ調整される。	体外、灰色 その他の淡灰色	1~3mm石英含む	良好
14	F 3層	土器部 杯身 口~底	(10.5)	立ち上がりが小さく内傾する杯身。口径が10.5mmの小形足である。断面はろくろ右廻りかヘラケズリの他は、回転ナデ調整される。	淡灰色	1~2mm石英含む	良好
15	Q 4層	土器部 杯蓋 1/2片	(15.0) (3.1)	口縁部を輪状につくるもので、輪状のつまみが付く。天井部上半はろくろ右廻りかヘラケズリ。内面には輪状から右廻りで回転ナデ、それより内側は停止ナデ。天井部は「之跡」の墨書きがみられる。	外、淡灰色 内、灰褐色	1~2mm石英含む	普通
16	R 4層	土器部 杯蓋 1/2片	(15.5)	口縁部を輪状につくるもので、つまみを欠失している。天井部上半はヘラケズリ。西面は風化焼成しているが、口縁から中程にかけて回転ナデ。それより内側は停止ナデされる。	灰白色	1mm石英若干含む	普通
17	C M1薄 M1薄	1/2片 2.0	(15.4) (3.0)	口縁部を輪状につくるが、突出は小さく、外方は凹み沈線状をなす。天井部上半はろくろ右廻り、下半から内面にかけて回転ナデ。それより内側は停止ナデとされている。	にぶい褐色	1~2mm石英若干含む	良好
18	M 1層	土器部 杯蓋 口~大井	(16.0)	口縁部を輪状につくるので、つまみを欠失している。天井部上半はヘラケズリ、他は回転ナデ調整される。	上、暗灰色 下、灰色	0.5~3mm白色砂含む	やや古 い
19	P 3層	土器部 杯蓋 口~天井	(15.5)	口縁部を輪状につくるが、突出は小さく、外方は凹み沈線状をなす。天井部上半はろくろ右廻りのヘラケズリ、下半から内面にかけて回転ナデ。それより内側は停止ナデを施す。	口、暗灰色 他、淡灰色	1~3mm石英若干含む	良好

番号	調査階層	器部	種類	口径	径深	文様・手法・特徴	色	調	胎土	焼成
20	Q 4層	須恵器 杯身 口～底	(13.4)	無蓋台で、体下半が丸く立ち上がる杯身。底部はろくろ右廻りのヘラケズリ、体部は回転ナメで、内面は風化によって捲輪している。		淡灰色		1mm石英含む		普通
21	F 胎土	須恵器 有高台杯底		高台7.1cmの小形杯。高さは小さくふんぼりをもつ。体下半は丸く立上る。外側にはしもより状に自然縞が薄くかかる。		灰色		0.5mm石英若干含む		普通
22	I 3層	須恵器 有高台杯底		高台は比喩的良くふんぼりをもつ。体下半は丸く曲線的、外側から内面止まで回転ナメ調整され、内底面には停止時のナメが施される。金体に薄手づくりである。		灰色		1mm石英若干含む		普通
23	F 胎土	須恵器 有高台杯底		蓋部から体部が丸瓶もつた杯身。高台は低くやや角ぼつっている。外側から内面にかけて回転ナメ調整され、内底面にはきらんに露出ナメを施す。		体下半～高台、 暗灰色 灰		0.5～1mm石英少量含む		普通
24	R 4層	須恵器 有高台杯 1/2片	(13.8) (3.7)	蓋部と体部の境には模がはいり、体部は丸く立上る。高台は小さく、角ぼつ。体外部には自然縞が薄くかかる。体内内面に回転ナメ。内底面は終止ナメ。外底面には浅挂の痕跡有り。		褐色、アズキ色 灰		1～2mm石英含む		良好
25	R 4層	須恵器 有高台杯 口～底	(14.5) (5.4)	直立気味の高台で、体部は比喩的に廻く。全体に風化を受け捲輪している。		灰褐色		1～2mm石英含む		良好
26	F 3層	須恵器 碗・蓋?		ふんぼりをもつ高台の碗の蓋が置の置物であろう。外側から内面にかけて回転ナメ調整され、内底面は終止ナメが施されている。		灰色		1～2mm石英含む		普通
27	J 1層	須恵器 蓋		高台はややふんぼりをもつ、底部と体部との境には模がはいる。金体に風化を受けている。		青灰褐色		0.5～1mm石英含む		甘い
28	J 1～3層	須恵器 裏口	(25.0)	楕円形に開く口黒部で、内側は丸く肥厚され玉縁状をなす。回転ナメ調整される。全体にややローリングを受けている。		淡灰色		0.5～2mm石英含む		普通
29	M 1層	須恵器 蓋		丸く張りをもつ壺蓋部。外側は平行条縦タスキのあとカキ目調査される。内面は同心円文で貫繩が残る。		灰色		1～4mm石英含む		普通
30	M 1層	大鉢系 蓋		大鉢系の瓦質土器である。桔子口タスキのあと、浅い枕縫を2本施している。内面は風化によって釉粒が浮き出ている。		外、暗灰色 内、淡黄色		1～3mm石英含む		軟質
31	N 4層	大鉢系 蓋		大鉢系の瓦質一器。外蓋は桔子口タスキ。内面は風化を受けたがナメか。色調、胎土が30に類似しており、同一個体の可能性もある。		外、暗灰色 内、淡黄色		1～2mm石英含む		軟質
32	B 3層	大鉢系 蓋?		外蓋に細目の幾重タスキを有する陶質上蓋。内面は火ぶくわ状に凹凸がみられ、ナメ調整される。		外、青灰褐色 内、赤味もつ灰色		0.5mm石英少量含む		良好
33	F 胎土	大鉢系 高杯?		陶質土器の蓋部分である。底部は丸く肥厚され、外蓋には尖り気味の小さな突起がつく。全面回転ナメに仕上げられる。		褐色、アズキ色 灰		1mm石英少量含む		やや良好
33	N 4層	縁器 高台付皿 1/2片		体部内面に格や半円状の文様など描く。浅い文様には幾略的な蔓草状の文様を描く。小さな高台は無脚で妙が石付く。高台内に2条圓溝を施す。底辺見底であろう。		灰白色の胎土に、男尾 灰白色がサンドイッチ状 にはいる				普通

ている。1点を図化した。

Ⅲ (34)

伊万里系の染付皿である。体部内面に松や半円状の文様、裏には簡略な蔓草状の文様を描く。小さな高台は脇付が無釉で砂が若干付着している。ぶ厚いつくりで、波佐見焼と考えられる。

(5) 出土土器の組成について (第11図、表2)

今回調査では2,060点の土器・陶磁器が出土した。そのうち主体を占める古墳時代後期「奈良時代」の土器は2,040点出土しており、その組成についてみたのが第11図である。

上師器と須恵器の割合は、上師器62.5%、須恵器37.5%で、西彼杵郡大瀬戸町串島遺跡や大宰府史跡^(注3)の成績と比較すると、大宰府に近い数値を示している。時期的に古墳時代後期の段階を本遺跡が包括していることに一つの理由を求めることができるかもしれないが、当地における須恵器の普及度を示すものであろう。

機能別にみると、土師器壺・瓶・カマド等の煮沸形態が57.3%を占め、須恵器壺・壺の貯蔵形態が23.3%、供膳用の土師器杯・碗、須恵器杯・蓋等が19.4%という成績がでている。このデータは、煮沸具が多い点で串島遺跡と共通性をもっており、供膳具が79.8%を占め優位性を示す大宰府と対照的な位置にある。

平城宮では奈良時代を通じて食器類が70~90%以上の高率を示し、「多人数を前提とした画一的な食膳方式」をとる「中央官衙および宮」の特殊性^(注4)といふ評価がなされており、大宰府の報告者である赤司善彦氏も「官衙遺跡の一般的な構成比率」とされている。

煮沸形態が多いのは、砂丘で水産加工を中心とした煮沸作業が行われていたことが串島遺跡と本遺跡双方に考えられるが、本遺跡において貯蔵形態の数値が高い点が注目される。このことは、両者において作業対象物や作業工程の差異があり、それが反映した結果と理解され、両者のもつ歴史的個性を暗示するものであろう。

本遺跡では、干鰯製造が主体的になされたことが推測されており、平川敬治氏は①身の剥離②塩づけ③水洗い④ゆがき⑤乾燥という一連の作業工程により加工がなされ、塩づけのために製塩土器が、ゆがきのためにカマドや把手付壺が関連したことを指摘されている。貯蔵形態が多い点もこの作業工程に則して考えると、塩づけや水洗いの際に貯蔵具が使用された可能性が高いことが推察されよう。

(宮崎)

器種別割合	土師器 62.5%				須恵器 37.5%						
	甕・瓶・カマド	57.3%	杯	5.3%	甕	12.4%	壺	10.9%			
機能別割合				煮沸具 57.3%		貯蔵具 23.3%		供膳具 19.4%			
車馬 (1980)	土師器 82%				須恵器 18%						
煮沸具 74.4%				貯蔵具 7.6%		供膳具 18%					
大宰府 赤司(1989)	土師器 60%				須恵器 40%						
煮沸 11.1%		貯蔵 9.1%		供膳具 79.8%							

第11図 出土土器組成グラフ

表2 出土土器数量表

試掘場	A	B	C	D	E	F	G	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	計
居 位	1	3	3	3	1	1'4	1	3	3	1	1'2·3	1	1'3'1'3	1	3	1	1'4	3
土 師 器	5	223	2		65		348	13		2		35	7	21	15	17	20	1,168
甕・瓶	2	33			2		22			1		3	6	8	5		17	4,2,3,108
系 脱 器	1	1	12		1		55	17		3		24	3	23	17	9	5	1,276
甕	1				1					5		1	19	4	9	18	1	252
壺	2	2					4	36	9	1		5	1	17	5	15	24	764
杯・蓋	2	5	3	2	3	42	8		3	1	39	15	52	14	1	19	43	223
そ の 他	人1	大1	赤1	古1	赤1		大1	近1	近3		近1	大1	大1	人1	近1	吉1	近2	20
計	3	11	282		72	8	551	1	17	120	18	185	64	39	87	475	48	2,690

注 大：大陸系土器、赤：弥生土器、古：古式土師器、近：近世陶磁器、括：攝土

2. その他の遺物

木器、骨角器、土錐、石製品等が出土している。

(1) 木 器 (第12図、図版8)

杭である。表面が少し腐蝕が進んでいるが、先端部のカット痕はわかる。カット面は一面で、最低でも3度の切裁具で切り込んだ跡が残っている。切裁具の刃こぼれの跡も残る。長さ51.8cm、中心部径5.9×5.4cm。Q試掘場2層出土。

(2) 骨角器 (第13図、図版8)

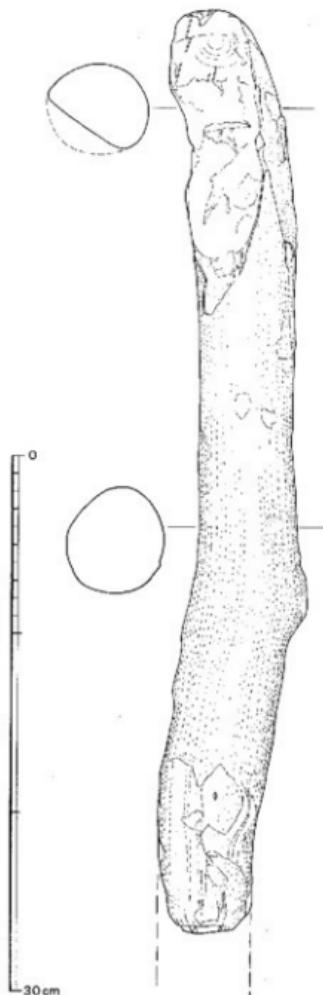
1は、鹿角製の骨角器である。鹿角の一面に平らな加工痕が残っている。山形に整形するが、山の頂点からそれぞれ反対方向に加工していたものと思われる。刀子の柄か？残存部長6.9cm、幅1.7cm。M試掘場2層出土。2は、不明骨角器。残存部に三面の平坦な加工面があるが、推定復原して考えれば多面体になるものと思われる。獣骨製。残存部長4.2cm、同幅2.0cm、G試掘場出土。

(3) 土 锤 (第13図、図版8)

3は、土錐である。色調は暗褐色、中の管の幅は3mm。ほぼ完形。長さ4.7cm、幅1.4cm。F試掘場2層出土。

(4) 石 製 品 (第13図、図版8)

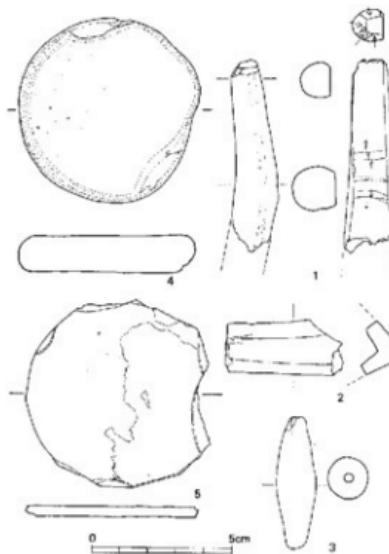
4・5は、円盤状石製品。4は、円形の扁平な石を使用している。片面には擦痕が全面に認められる。安山岩製か？長さ6.6cm、幅6.5cm。P試掘場2層出土。5は、片岩を薄く扁平に削りした石の周辺を二次整形して円盤状に仕上げている。長さ6.7cm、幅6.7cm。M試掘場1層出土。



(村川)

第12図 出土木器(1/3)

- 註1 川述昭人・森田勉「須恵器について」『牛頭窯跡群II』 福岡県文化財調査報告書第89集 福岡県教育委員会 1989
- 2 宮崎貴夫「出土土器について」「串島遺跡」 長崎県文化財調査報告書第51集 長崎県教育委員会 1980
- 3 赤司善彦「大宰府出土土器の検討」『九州歴史資料館研究論集14』 九州歴史資料館 1989
- 4 山中敏史「8・9世紀における中央街と土師器」「考古学研究76号」 考古学研究会 1973
- 5 註3文献
- 6 平川敬治編「串山ミルメ浦遺跡」 勝本町文化財調査報告書第4集 勝本町教育委員会 1985



第13図 その他の遺物(1/2)

IV 結 語

昭和55年と昭和63年の二次にわたる前回調査において、砂丘部にアワビ加工を主体とした古代生産遺跡が営まれていたことが判明していたが、今回の第三次調査によって砂丘西側のミルメ浦と呼ばれる干潟に、海底貝塚（約2,000m²）と木片等が出土する地域（約2,600m²）が確認された。

貝層からは、砂丘部分と同様に古墳時代から奈良時代にかけての土器類を主体とし、骨角器や獸骨も出土している。貝塚は舌状に干潟に広がっており、砂丘から流れ込んだものでなく、海辺へ貝等を投棄していった結果形成されていったものと推測される。

また、木片や種子等が発見された区域は小串平島の陰になった所で、船の繫留地としても適した場所と考えられる。想像をたくましくすれば、沈んだ船や廻調の品目を木の荷札に書いた木簡等が残存していることも予想され、墨書き土器の発見が、その考え方をいっそう増幅する。

三次の調査成果から、遺跡の主体的な活動が開始されたのは6世紀後半頃で、8世紀後半頃まで継続して生活が営まれたことが明らかとなっている。

本遺跡の成立に関しては、南側丘陵頂部に在る串山古墳群の被葬者が密接な関係をもつたことが考えられる。前方後円墳の被葬者である在地首長を頂点とした支配隸属関係にある海人集団の姿がうかび、すでに古墳時代後期に調の前進的な貢納関係があったことをうかがわせる。

二次調査で検出された1号住居跡は作業工房的性格をもつものであろうが、注目されるのは玄界灘式製塩土器と呼ばれるタタキをもつ土師壺臺が、同様のタタキを有する瓶・把手付壠とともに6世紀末頃に位置づけられる須恵器杯蓋と共に伴したことである。

「海の中道遺跡」のなかで横山浩一氏は、玄界灘式製塩土器は7世紀後半に遡る可能性をもつて大半は8世紀後半から10世紀におさまるとしている。^(注1)したがって、1号住居跡出土品は、先進性をもつた初源的な資料として評価できよう。

また、全羅南道の多島海には「釣魚・煮塩」を業とする「水賊」があり、また济州島には海岸を仮りの住居として漁撈に従事し、熨斗船を作る海民があり、これらの海民との交流のなかにその源流を求められないだろうか。^(注2)タタキは朝鮮半島で盛行する技法であり、必ずしも本土の須恵器工人との関連は考えなくてよいのではなかろうか。

663年に白村江で唐・新羅の軍に破れ、防人・烽が置かれたが、竇岐の最北端に位置しており、本遺跡付近に配備されたことは充分に考えられる。

天ヶ原石棺群B地点では、石棺内から7世紀中頃からやや下る時期の須恵器とともに、鐵刀・鐵劍が出土し、なかでも劍の存在が注目される。海人は漁撈活動と航海活動にたずさわるが、造船技術にも秀でていたことが考えられ、海を眺望する立地の在り方からもこの石棺群が海人集団の墓地であったことを予測させる。

7世紀後半には高塚古墳の造営がほぼ終了し、律令制による中央集権的な支配体制の再編

がなされ、本遺跡も租庸調の貢納体制に組み込まれていったことが考えられる。

生産遺跡としての評価は、一次の調査者である平川敏治氏と二次の調査者の安楽勉氏では、若干異なるようである。すなわち、平川氏は季節的な作業場とするのに対して、安楽氏は集落は別に存在するが一年中使用された作業場としての考え方をもっておられるようである。両者は、冬場に季節風が厳しく居住に不向きな立地にあることを考慮しているようである。

大宰府主財の跡と推定されている海の中道遺跡について、報告の総括のなかで横山浩一氏は、「縁釉陶器、輸入陶磁器、銅帶金具、青銅簪等々、季節的な仮住いにはふさわしくない物品が数多く出土しているのであるから、やはり、ここが生活の本拠であり、年間を通じての居住地であった可能性の方が強い」とされている。

この海の中道遺跡と比較すると、奢華的な物品がみられないこと、砂丘自体が小規模である点などから、今のところ安楽氏の水産加工場遺跡が妥当な考えではないかと思っている。

本遺跡の衰亡は、出土土器からみると9世紀初頭まで下る資料はないようで、このころには水産加工施設としての機能を停止したようである。その要因については、現時点では謎としかいいようがないが、消極的な意見としては本遺跡が小串と串山半島の限られたエリアに在るために製塩や水産加工に伴う煮沸に大量に使用される薪の不足によるものかとも想像するが確固たる根拠はもちえない。

815年に宍戸に異賊が襲来したために、二ヶ所の関（可須の見目関と箱崎の関）と14ヶ所の要害を置くとあり、見目関は須藤資隆氏によると串山の丘陵上に比定されているが、この段階には本遺跡は機能を停止していたことが推測されよう。

最後に、本遺跡のもつ別の重要な側面である龜卜について論じたいが筆者はその力をもちあわねせない。おそらく宍戸の国政レベルまでも龜卜によって占ったことが予想されるが、卜部（伊岐）氏の系譜については横山順氏の論稿を参照願いたい。

以上、遺跡の内容について述べてきたが、本遺跡は古代生産の在り様を如実に示してくれる典型的な遺跡で、その価値は非常に高く、保存・活用し、後世に伝えていくべき重要遺跡であると思われる。

（宮 騆）

追記：墨書き器は、赤外線フィルムによって撮影を試みたが、「之嶋」と判読できる以上の成果を得ることができなかった。文字は「之嶋」と書いてあると考えられ、欠落部分を推測すれば、おそらく「宍戸之嶋」と書かれてあったのではないかと想定されるが、それ以上の推論はできない。

- 註1 横山浩一「玄界灘式製塙上器（上）・（中）」『九州文化史研究所紀要第二十九号・第三十号』
九州大学九州文化史研究施設 1984・1985
- 2 綱野善彦「中世からみた古代の海民」『日本の古代8 海人の伝統』 中央公論社 1987
- 3 平川敬治編『串山ミルメ浦遺跡』 勝本町文化財調査報告書第4集 勝本町教育委員会 1985
- 4 安楽勉氏教示
- 5 横山浩一「調査の総括」『海の中道遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集 福岡市教育委員会 1982
- 6 須藤資隆「勝本町通史」『勝本町史上巻』 勝本町 1985
- 7 横山順「岩岐のト部」『串山ミルメ浦遺跡』 勝本町文化財調査報告書第7集 勝本町教育委員会 1989

図 版



遺跡遠景（西から）



遺跡近景（北西から）

図版 2



調査風景



A 試掘場(東壁)



B 試掘場(南壁)



C 試掘場(南壁)

土層 ①

図版 4



I 試掘壙(北壁)

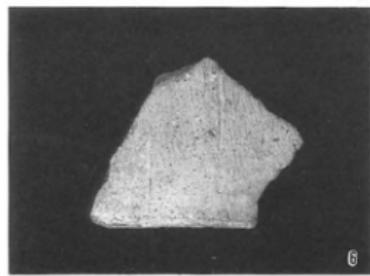
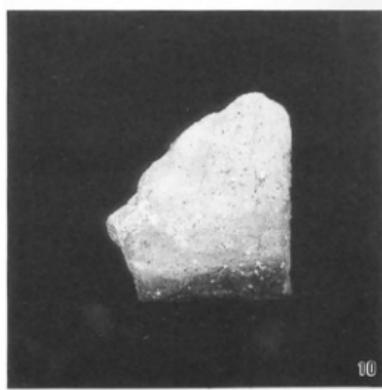
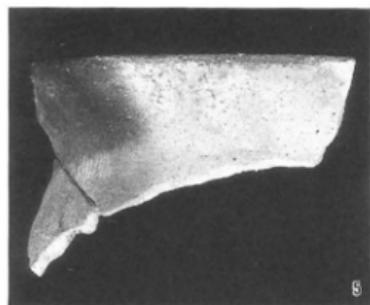
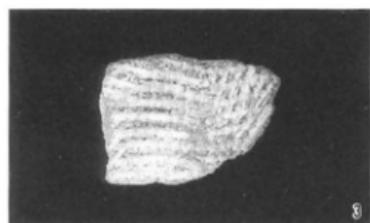
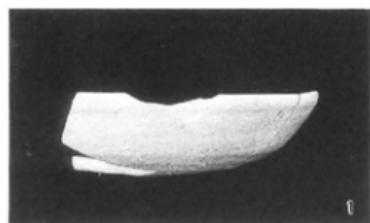


L 試掘壙(東壁)

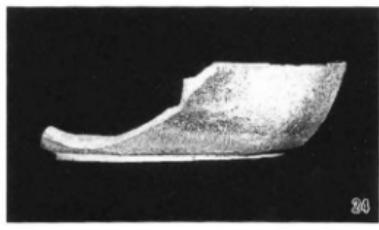
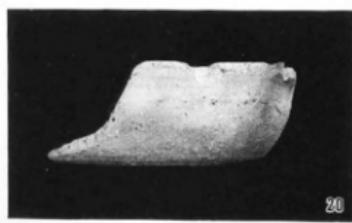
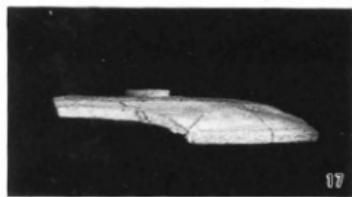
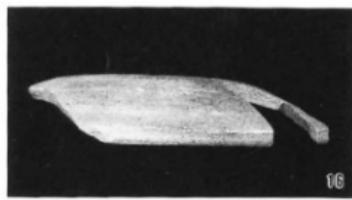


O 試掘壙(東壁)

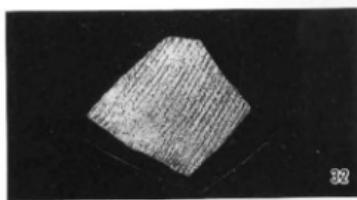
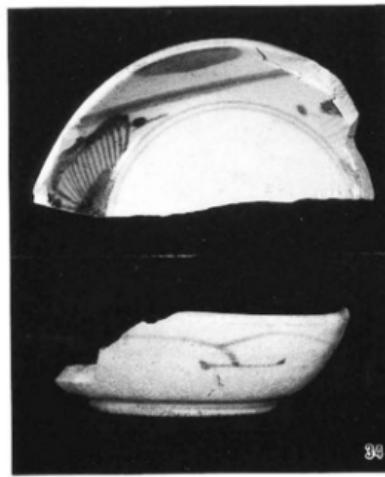
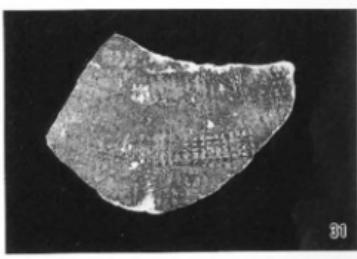
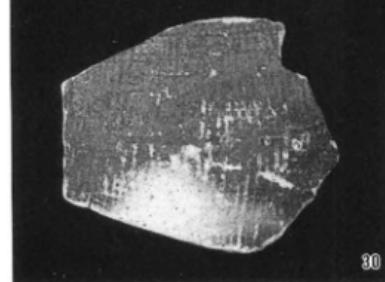
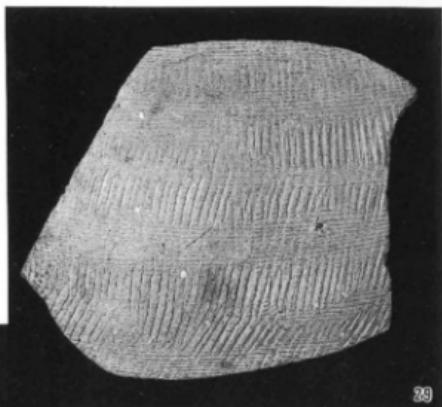
土層 ②



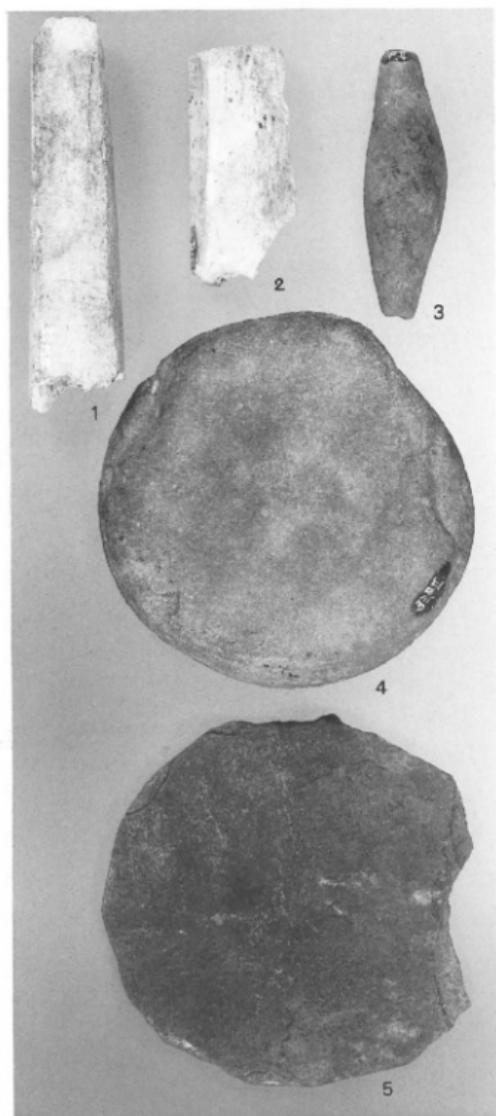
出土土器① (1 / 2)



出土土器② (1 / 2)



出土土器③ (1 / 2)



その他の遺物（木器 1 / 3, 他は 1 / 1）



天ヶ原石棺群日地点出土遺物

勝本町文化財調査報告書第8集
串山ミルメ浦遺跡

平成2年（1990）3月31日発行

発行所 勝本町教育委員会
長崎県壱岐郡勝本町西戸舎182-5
〒 811-55 ☎09204-2-0095

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007
〒 854 ☎0957-22-6000
